

※このリーフレットは、自閉スペクトラム症について、あまり詳しくない方に、とりあえずのことを知って頂くためのものです。同じ自閉スペクトラム症という診断名がついていても、各人への現れ方は千差万別で、ここに書かれている事例などは、その中のごく一部でしかないことにご注意ください。

自閉スペクトラム症の人の特性 (ローナ・ウィングによる3つ組)

自閉スペクトラム症の人には、そうでない人と比べて以下のような一般的な特性があります。
ただしスペクトラム（虹）ですので、人によって「濃い」「薄い」のグラデーションがあります。

① 社会性の違い



よりも

「みんなでやろう！」よりも「ひとりでする」ことが好きな場合が多いです。
「みんなに合わず」よりも「自分が正しいと思ったこと」を優先することが多いです。
まわりを見て、「こういう場面では、こうするのか」というルールを自然に身につけていくことは苦手です。後で述べる「わかる方法」で、どう振る舞うのがいいのか教えてもらわないといつまでたってもわかりません。しかし周囲からは「わかっていて当然だ」と思われて叱られることも多いです。

② コミュニケーションの違い

知的に高い方でも、「誰から」「誰へ」「どんな内容で」やりとりされているのか、やりとりしたらいいのかわかっておられない場合も多いです。また知的に重い方の場合は、コミュニケーションの存在そのものに気づいておられないことがあります。しかしこれも「わかっていて当然だ」と思われて叱られることも多いです。

③ 他人が頭の中で考えていることを想像しづらい

他人が頭の中で考えていることは見えません。見えない物はわからない場合が多いです。そしてこれは「相手の気持ちを忖度する」ことや「場の空気を読む」ことがすごく苦手な理由です。

※自閉スペクトラム症の方とおつきあいされれば、①②③は独立したものではなく、相互に絡み合い、よりご本人の暮らしが困難になる原因になることがおわかりになると思います。

その他の影響の大きい特性

1. 感覚の過敏や鈍感



聴覚過敏はよく知られるようになり、イヤマフをつけている方もよく見るようになりました。



暑さ寒さに鈍感な方もおられます。冬の湖を前にして、服を脱いで泳ごうとされる方もおられます。

2. 音声言語の意味はわかりにくく、見えるものならわかりやすい

音声でなく、実物、絵、図、文字などで伝えると伝わりやすいです。
音声は聞こえていてもイメージしづらかったりするようです。いったん覚えておいて、続く音声と合わせて判断することも苦手な場合があります。

3. 段取りや時間の流れの見通しがつきにくい

見通しがつかないと不安になります。一部の人は周囲への反復質問になることもあります。
見てわかる手順書や、見てわかるスケジュール、見てわかるカレンダーなどがあると助かります。

こういう方たちに「普通」に「手立てなく」関わり続けているとどうなるのでしょうか？

私も含め自閉スペクトラム症でない（あるいは診断を受けるほどではない薄さの）人たちは、基本的に音声言語でのコミュニケーションがあたりまえの世界で生きています。そのため「音声言語でコミュニケーションすることが『普通』だ。それが良いことだ」という常識を持ちがちです。



しかし①②③1.2.3.などの特性を持つ自閉症スペクトラムの人たちにその常識を押し付けるとどうなるのでしょうか？自分の身の回りに何が起きているのかわからない、非常に不安な状態にさせてしまいます。

成人の、非常に関わるのが困難にされてしまった方について「意思の疎通ができません。何を考えておられるのかわかりません」と言われ、「しかし、過去の記録には『ことば（音声言語）はわかる（わかるようだ）』と書かれているのでわかっていると思われまます」ということがよくあります。

「ことばがわかる」のに、なぜ「意思の疎通ができない」のでしょうか？たいていの場合は、記録を書いた方の思い込みです。もちろん「一部はわかっている」場合もあるでしょうが、まだらにわかっている、意味が違っている、等で意味ある文としては機能していなかったと考えられます。

また「短い言葉（音声言語）での要求」ができたとしても、音声言語を理解することはとても難しい場合が多いです。記録された方は「目も合わさず、直立不動で、小声で『〇〇君、□□を取って来てください』と指示してみたりされたでしょうか？（このあたりは大田のステージのLDTというテストをしてみると、短時間でよくわかり、ご本人への負担も少なくてすみます。『[認知発達治療の実践マニュアル](#)』（日本文化科学社）

コミュニケーションの意思表示の部分についても、小さな頃から2択からはじまる選択活動や、様々な手立てで適切に意思表示できる。特に拒否が認められ、またたくさん褒められる体験を積む。などができていないと、ご本人の使える手立てが暴力や破壊、パニックくらいしかないということにもなりかねません。

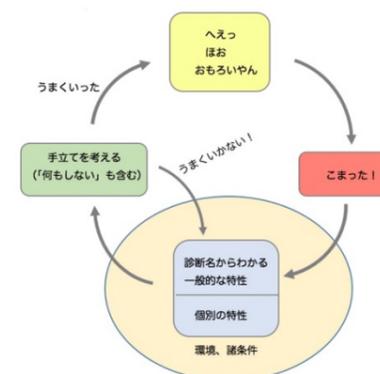


ではどうしたらいいのでしょうか？

まず、その方をよく見、聞き、感じ、また少し働きかけてみたりして、その方をよく知ってください。そして、その方が何が好きで、何がやりたくて、何が嫌か、とか個人的なことをたくさん知って下さい（観察するわけです）。

診断名がわかれば一般的な特性はわかりませんが、個別の特性は、記録を読んだり、観察したりしなければわかりません。

それらがわかって、初めて「どう関わっていったらいいか」がわかります。



そして、好きなことが何月、何日に起こるのか（カレンダー）。やりたいことが今日のいつできるのか（スケジュール）。どっちがやりたいのかな（選択活動）？ここはこれをする場所だよ（物理的構造化）。おお、ひとりでこれできたね（自立課題学習）。など、ご本人にわかりやすく、安心して活動でき、ほめてもらえる環境を作っていきます。

すると、ご本人も、周囲も楽で楽しい生活が送れると思います。

さらに深めたい方のために

[自閉症のひとたちへの援助システム](#)
（朝日新聞厚生文化事業団）

[自閉症児と絵カードでコミュニケーション](#)
（二瓶社）

[3ステップで行動問題を解決するハンドブック](#)
（学研プラス）

[改訂版 自閉症・発達障害の人への支援（伝える・尋ねる）](#)
（おめめどう）